

感染症発生動向調査情報による徳島県の患者発生状況（平成20年）

徳島県保健環境センター

石田 弘子・湯浅 京子¹⁾

Infectious diseases surveillance reports in Tokushima Prefecture in 2008

Hiroko ISHIDA and Kyouko YUASA

Tokushima Prefectural Institute of Public Health and Environmental Sciences

I はじめに

当所では、「徳島県感染症発生動向調査実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして、徳島県における感染症の発生情報の収集、解析を行っている。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民等に還元し、感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。

本報告では、平成20年1月から12月までの患者発生状況についてまとめた。

II 方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は、一類から五類感染症、新型インフルエンザ等感染症の全数把握対象疾患の76疾患、指定届出機関から届出を受ける定点把握対象疾患の25疾患とした。

感染症の発生情報は、定点把握対象疾患のうち、内科、小児科、眼科及び基幹定点週報分は、月曜日から日曜日までを1週単位で、性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計解析を行った。

III 結果

1 全数把握対象疾患の届出状況（表1）

(1) 一類感染症

一類感染症の届出はなかった。

(2) 二類感染症

二類感染症は、結核217件の届出があった。月別の届出数は11件～25件で推移していた。年齢階級別では、70歳以上が全体の約7割を占めた。症状別では、患者が201件、疑似症患者が2件、無症状病原体保有者が12件、感染症（疑い）死亡が2件あった。

(3) 三類感染症

三類感染症は、腸管出血性大腸菌感染症13件の届出があった。過去5年間では、平成18年の届出数が集団発生のため49件と多かったが、それ以外の年では10数件の届出数である。届出時期では6～9月が11件と気温の高い時期の発生が多かった。患者の年齢分布では、5歳未満が全体の1/3を占めた。また、HUS（溶血性尿毒症症候群）を発症した事例は2件あったが、いずれも5歳未満の幼児であった。症状別では、患者が9件、無症状病原体保有者が4件であった。型別はO157VT2が6件、O157VT1VT2が3件、O157VT（型不明）1件、

表1 全数把握対象疾患の届出数

類型	疾患名	平成20年	前年
二類	結核	217	159 ^{*1)}
三類	細菌性赤痢		1
	腸管出血性大腸菌感染症	13	19
四類	つつが虫病		1
	日本紅斑熱	2	2
	レジオネラ症	2	2
	A型肝炎		1
五類	ウイルス性肝炎(E型, A型を除く)		3
	アメーバ赤痢	2	
	クロイツフェルト・ヤコブ病		1
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1	1
	後天性免疫不全症候群	2	3
	梅毒	1	1
	破傷風	1	
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1	1
	風しん ^{*2)}	1	
	麻しん ^{*3)}	3	

*1) 平成19年4月より追加されたため4月～12月の届出数

*2,3) 平成20年より全数把握対象疾患へ変更された

¹⁾ 現医療健康総局 健康増進課本務

O26VT 1が1件、型不明が1件であった。

(4) 四類感染症

① 日本紅斑熱

日本紅斑熱は6月に2件の届出があり、多く発生する時期とされている春先から秋であった。

② レジオネラ症

レジオネラ症は2月に1件、6月に1件の届出があった。ともに60代の男性であり、病型は共に肺炎型であった。推定感染経路は、水系感染であった。

(5) 五類感染症

① アメーバ赤痢

アメーバ赤痢は、7月、12月に各1件の届出があった。いずれも、病型は、「腸管アメーバ症」であり、30代、40代の男性であった。

② 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は4月に1件(80代)の届出があった。病原体は、G群溶血性連鎖球菌であった。

③ 後天性免疫不全症候群

後天性免疫不全症候群は5月、6月に2件の届出があった。患者は30代および40代の男性であり、病型は「AIDS」が1件と「無症候性キャリア期」が1件であった。推定感染経路は性的接触であった。

④ 梅毒

梅毒は7月に1件の届出があった。患者は50代の男性で、疾患区分は晩期顕症梅毒であった。推定感染経路は国内における同性間性的接触であった。

⑤ 破傷風

破傷風は、7月に1件(80代)の届出があった。推定感染経路は、古釘を踏んだことによる刺傷であった。

⑥ バンコマイシン耐性腸球菌感染症

バンコマイシン耐性腸球菌感染症は、6月に1件の届出があった。

⑦ 風しん

風しんは、4月に1件の届出があった。10代の女性で、ワクチン接種歴はなかった。

⑧ 麻疹

麻疹は、3～6月に3件の届出があったが、いずれも感染の拡大はみられなかった。また、1歳の2例については、ワクチン接種歴はなく、県外での感染と推定された。

2 定点把握対象疾患の動向(表2)

(1) インフルエンザ(鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)

年間報告数は5,487件で、前年(6,806件)より減少し、過去5年間で最も少なかった。本年の流行状況は、前期流行(平成19年/平成20年)では、平成19年第48週(1.05件/定点)から流行開始となり、平成20年第4週(32.76件/定点)をピークとし、第12週(1.29件/定点)まで流行が続いた。前年のピーク(第12週:28.18件/定点)と比較すると、約2ヶ月早くピークとなったが、ピークの高さはほぼ同じであった。後期流行(平成20年/平成21年)は、前年とほぼ同じ時期である平成20年第49週(1.05件/定点)から流行が開始し、平成21年に向けてゆるやかな増加となった。年齢層別報告数では、4歳以下25.6%、5～9歳36.9%、10～14歳13.3%、15～19歳2.9%、20歳代6.5%、30歳代6.5%、40歳代4.0%、50歳代2.3%、60歳以上2.0%であった。

(2) RSウイルス感染症

年間報告数は542件であり、前年比65.2%と減少した。前期流行(平成19年/平成20年)は、平成19年第38週から開始した流行を受け始まった。後期流行(平成20年/平成21年)では、前年よりも早い時期である8月中旬(第33週)から増加傾向となり、9月中旬(第38週)をピークとする流行となった。その後、第42週から第48週までは低い報告数で推移したが、再び増加し第52週に再度ピークをつけた。年齢層別報告数では、0歳43.5%、1歳35.8%、2歳12.4%、3歳以上8.1%であり、2歳以下が約9割を占めた。

(3) 咽頭結膜熱

年間報告数は632件あり、前年(209件)の約3倍と増加し、過去5年間で最も多かった。夏季に報告数が増加し流行が見られた後、第38週には減少した。第42週から再び増加傾向となり秋季から年末にかけても報告数が多い状態が続いた。年齢層別報告数では、1歳以下21.0%、2～3歳34.3%、4～5歳27.7%、6～7歳11.6%、8歳以上5.4%であり、5歳以下が約8割を占めた。

(4) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は1,455件あり、前年比117.5%とやや増加し、過去5年間で最も多かった。

本疾患は、冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされ、本年はその傾向が見られた。全国平均と比較すると、1年を通じて全国平均を下回っており前年と同様の傾向である。年齢層別報告数では、2～3歳14.8%、4～5歳32.2%、6～7歳29.1%、8～9歳10.6%、10～14歳9.8%であった。

(5) 感染性胃腸炎

年間報告数は7,717件あり、前年比92.5%とやや減少した。本年は、前年第51週にピークとなった流行を受け

始まり報告数は減少傾向であった。しかし、2月中旬(第7週)から報告数が再び増加し、4月中旬(第16週)をピークとした後、減少した。11月に入り、報告数が増加

し始め、第51週に報告数が多くなった。全国平均の推移では、第51週にピークを形成したが、同時期の本県の報告数は、9.96件/定点と低く、前年のピーク時の報告数

表2 内科, 小児科, 眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期 間	インフルエンザ	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	感染性胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性赤斑	突発性発しん	百日咳	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	12/31~	277	10		15	280	50	1	1	9	2	1	1		
2	1/7~	474	23	3	21	313	64		1	11	4	5	1		1
3	1/14~	814	13	4	27	259	39	2		9	2		4		
4	1/21~	1,245	17	4	42	246	70		4	10	2	1	3		1
5	1/28~	919	6	1	33	252	37	6	2	10	2		3		
6	2/4~	523	6	4	35	194	62	5	3	14	2		2		
7	2/11~	247	1	1	35	166	38	9	1	18	1		1		3
8	2/18~	217	6	5	55	184	54	1	6	17	3		1		1
9	2/25~	125	6	1	48	200	51	5	1	18	4		2		2
10	3/3~	63	6	8	53	243	40	5	3	17			2		1
11	3/10~	62	4	12	52	293	41	3	2	17	1		1		5
12	3/17~	49	3	1	47	293	43	11	1	18		2	1		
13	3/24~	37	3	5	46	280	43	12		22		2	1		
14	3/31~	18		4	33	272	56	15	1	19			2		1
15	4/7~	5	1	8	27	317	43	8	1	11			1		1
16	4/14~	8	2	22	51	333	46	8	3	13	1		3		
17	4/21~	2	4	14	46	268	49	16	3	18	1		1		
18	4/28~	6		11	30	265	58	16	4	9	3	4	1		
19	5/5~	1		16	28	175	67	12	3	14			2		
20	5/12~	10		7	45	182	39	8	1	15		3	8		
21	5/19~	8	1	13	58	164	72	31	3	19	1	4	5		
22	5/26~	1		9	39	124	74	37		8		12	9		
23	6/2~	1		10	46	112	48	51		16	1	17	3		
24	6/9~			15	38	82	54	64		15		25	2		2
25	6/16~	1	1	18	42	82	57	77	1	14	1	45	6		1
26	6/23~		2	27	29	61	40	86		18	3	62	4		
27	6/30~			13	25	50	34	73	1	18		94	3		
28	7/7~		1	4	23	56	20	59	1	21	1	95	8		
29	7/14~			9	15	44	20	46		14	2	141	5		1
30	7/21~		2	17	18	40	23	48		19		108	6		
31	7/28~		2	25	12	62	22	49		19	1	85	3		3
32	8/4~		2	15	12	64	20	40		25		69	5		2
33	8/11~		10	28	13	62	33	26		12		50	5		
34	8/18~		17	26	7	53	18	21		14		22	3		
35	8/25~		21	24	11	68	20	17	1	19		16	4		1
36	9/1~		27	22	7	65	42	12		20		18	11		2
37	9/8~		28	19	17	69	19	3	2	13		19	6		1
38	9/15~		38	2	5	48	6	7		8		5	5		1
39	9/22~		32	3	7	40	17	13	1	12		3	2		
40	9/29~	2	32	6	9	46	19	5	1	18		4	3		
41	10/6~		21	3	13	33	10	2		20		1	2		
42	10/13~	1	9	7	7	46	12	2	1	17	1		2		2
43	10/20~	2	20	17	14	67	28	4		15		3	4		
44	10/27~		16	22	12	56	18	8	1	11	2		3		
45	11/3~	26	7	20	13	72	22	6	3	9		1	6		1
46	11/10~	23	14	23	21	69	37	3	3	19	1	1	1		2
47	11/17~	12	10	22	23	102	37	5		15		2	1		
48	11/24~	13	13	15	19	101	35	2		28		1	1		
49	12/1~	40	8	13	30	116	32	6		12		1	1		
50	12/8~	70	18	23	26	198	40	7		13			1		3
51	12/15~	87	37	17	43	229	37	6	1	12			2		
52	12/22~	98	42	14	32	221	33	1		13			2		
合計		5,487	542	632	1,455	7,717	1,989	960	61	795	42	922	165	-	38

と比較して約1/2であった。年齢層別報告数は、0～1歳27.2%、2～3歳23.2%、4～5歳16.2%、6～7歳10.3%であり、乳幼児、学童が多く、前年と同様の傾向であった。

(6) 水痘

年間報告数は1,989件あり、前年比で134%と増加し、過去5年間では最も多かった。

前年の晩秋から冬期の流行に継いだ本年前期の流行は増減しながらも1.7～3.2件/定点で推移した。6月に入り減少傾向となり、7月～10月にはスパイク状の報告数の増加は認められたが、低い水準で推移したのち冬季の流行に向けて報告数は増加した。年齢層別報告数では、2～3歳が38.2%と多く、次いで0～1歳25.5%、4～5歳22.1%となっており、9歳以下の報告が大部分を占め、前年と同様の傾向であった。

(7) 手足口病

年間報告数は960件あり、非流行年と見られた前年(214件)の約4.5倍と増加し流行年と見られた。本年の発生状況は、5月中旬(第21週)から報告数が急激に増加し第26週(3.74件/定点)をピークとし、9月以降、報告数は少ない状態で推移した。年齢層別報告数では、2～3歳が47.1%と最も多く、次いで0～1歳27.3%、4～5歳17.7%と5歳以下で約9割を占め、前年と同様の傾向であった。

(8) 伝染性紅斑

年間報告数は61件あり、前年比15%と減少し、過去5年間では最も少なかった。本年は、年間を通じて報告数が0.3件/定点以下で増減し、流行は見られなかった。年齢層別報告数では、9歳以下の報告が全体の約9割を占めた。

(9) 突発性発疹

年間報告数は795件あり、前年とほぼ同じであった。過去5年間では750件～900件で推移しており、各年の報告数の差は僅差である。本年の推移は、前年とほぼ同じで季節的変動は見られなかった。年齢層別報告数では、1歳以下が97.2%を占めており、前年と同様の傾向であった。

(10) 百日咳

年間報告数は42件あり、前年比116.7%と増加した。過去5年間では最も報告数が多く、平成16年以降、年々増加している。年齢層別報告数では、20歳以上が38.1%と最も多く、次いで1歳以下31.0%、4～5歳9.5%となっている。前年と比較すると20歳以上が最も多くを占めている点は同じであるが、それ以外の年齢層である1歳以下が増加し、10～14歳の層で割合が減少している点

が異なった。

(11) ヘルパンギーナ

年間報告数は922件あり、前年比70.2%と減少した。例年、夏季を中心に多発する疾患であり、本年の流行は第24週から第33週におよぶ単峰型流行であった。ピークは第29週(6.13件/定点)であり、前年のピーク(第29週:8.43件/定点)より低かった。年齢層別報告数では、1歳以下35.6%、2～3歳37.3%、4～5歳19.1%、6歳以上8%であり、3歳以下が約7割を占めており、前年と同様の傾向であった。

(12) 流行性耳下腺炎

年間報告数は165件あり、前年比で60.9%と減少し、過去5年間では最も少なかった。本年は、1年を通じて0.5件/定点以下で推移し、前年に続き非流行期と見られた。年齢層別報告数では、2～3歳が30.9%と最も多く、次いで4～5歳27.3%、6～7歳17.7%と、2～7歳が全体の約3/4を占めた。

3 眼科定点報告対象疾患の動向

急性出血性結膜炎は、前年に続き報告がなく非流行年であった。

流行性角結膜炎は、年間報告数は38件であり、前年比で80.9%とやや減少し、過去5年間では最も少なかった。本年は第11週にスパイク状のピークをつけたが、それ以外は0.75以下で推移した。年齢層では、10歳未満からの報告はほとんどなく、30歳以上が全体の約8割を占めた。

4 基幹定点報告対象疾患の動向

(1) 週報告対象疾患

細菌性髄膜炎は、2件(第12週、第38週)であり、年齢は50代、80歳以上であった。そのうちの一例については、肺炎球菌(*Streptococcus pneumoniae*)が分離されている。

無菌性髄膜炎は、報告がなかった。

マイコプラズマ肺炎の年間報告数は、3件(第30週:2件、第52週:1件)であった。年齢層別報告数では20代、30代、70代であった。

(2) 月報告対象疾患(表3)

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症の年間報告数は、365件(男性239件、女性126件)あり、前年比92.3%とやや減少した。年齢別では前年と同様に50歳以上からの報告が多く、70歳以上の年齢層からの報告数が252件と全体の約7割を占めた。

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症の年間報告数は、15件(男性8件、女性7件)あり、前年と同じであった。年齢別では10歳未満が8件、50歳以上が7件であった。

薬剤耐性緑膿菌感染症の年間報告数は3件(男性1

件、女性2件)あり、前年とほぼ同じであった。年齢層はすべて50歳以上であった。

表3 基幹定点(月報)報告対象疾患の月別報告数

	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	薬剤耐性緑膿菌感染症
1月	44	—	—
2月	18	1	—
3月	49	5	—
4月	42	—	1
5月	40	4	1
6月	11	1	—
7月	17	—	—
8月	20	—	—
9月	22	—	—
10月	42	2	—
11月	18	—	—
12月	42	2	1
総計	365	15	3
前年	390	15	2

5 性感染症定点報告対象疾患の動向(表4)

性器クラミジア感染症の年間報告数は198件(男性162件、女性36件)であり、前年よりわずかに増加した。本疾患は性感染症全体の半数を占め、平成17年以降増加傾向となっている。季節変動は見られず、12~22件/月で推移した。年齢別報告数では、20~39歳の年齢層で全体の75%を占めている。男性は20、30代の報告が多く63%を占め、女性は20代の年齢層が最も多く75%を占めた。

性器ヘルペスウイルス感染症の年間報告数は87件(男性63件、女性24件)であり、前年比で152.6%と増加し、過去5年間で最も多かった。一定の季節変動は見いだせないが、7月、10月、12月に報告数が多い。15歳以上のすべての年齢層で報告があるが、20~39歳で全体の半数を占め、特に30~34歳の年齢層が多い。

尖形コンジロームの年間報告数は、63件(男性48件、女性15件)であり、前年(68件)よりやや減少した。15歳以上の年齢層で報告があるが、20代、30代で全体の70%を占めた。

淋菌感染症の年間報告数は51件(男性50件、女性1件)あり、前年比68%と減少した。15~59歳で報告があったが、25~29歳、30~34歳の年齢層において報告が多かった。また、性

別では50歳代の1件を除き、すべて男性の報告であった。

表4 性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器クラミジア感染症	性器ヘルペスウイルス感染症	尖形コンジローマ	淋菌感染症
1月	12	5	9	8
2月	18	6	1	2
3月	16	8	7	2
4月	15	6	5	3
5月	16	7	7	1
6月	22	7	7	5
7月	19	13	5	3
8月	14	5	4	3
9月	18	6	5	7
10月	20	9	5	7
11月	15	5	4	3
12月	13	10	4	7
総計	198	87	63	51
前年	194	57	68	75

IV まとめ

平成20年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について、その動向を検討した。

全数把握疾患では特筆すべき疾患はなかった。

小児科定点報告対象疾患では、RSウイルス感染症において、例年より早い時期である8月中旬から増加が見られた。また、咽頭結膜熱、手足口病では報告数が前年を上回る大きな流行となったが、伝染性紅斑では前年と異なり大きな流行は見られなかった。

眼科定点報告対象疾患では、流行性角結膜炎の報告数が過去5年間で最も少なかった。また、急性出血性結膜炎は報告がなく前年に続き流行は見られなかった。

基幹定点報告対象疾患では前年と比較して大きな変化はなかった。

性感染症患者の年間報告数は399件、前年と比較するとほぼ横ばいであるが、過去5年間で最も多い報告数となった。平成16年以降、報告数の増加傾向が続いており、報告の多い20代、30代を中心に注意喚起をしていく必要があると思われる。

今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに、適切な情報提供を行っていきたい。